



■ 悪性腫瘍(あくせいしゅよう)

腫瘍のうち、大きくなって周りに広がったり、違う臓器に移ったりして、命に危険が及ぶ可能性のあるもののことです。

皮膚や粘膜からできるものを「がん」、骨や筋肉、神経からできるものを「肉腫」と呼びます。

■ 悪性心嚢水(あくせいしんのうすい)

心臓を包む袋状の膜(心膜)の中に、多量の液体がたまった状態を「心嚢水」と言います。心嚢水には悪性と良性があり、悪性心嚢水はがんが原因で引き起こされるものを指します。

心膜や心筋にできたがん、または、肺・食道などにできたがんが心臓へ広がってくることで起こります。

心膜の中にたまった液体によって心臓が圧迫され、血液を全身へ送り出す働きが妨げられます。また、リンパ管を圧迫することでリンパ液の流れがさえぎられ、細菌やウイルスに感染しやすくなります。

治療は基本的にたまった液体を取り除くことですが、患者さんの状態により異なります。

■ アロマターゼ阻害剤(あろまたーぜそがいざい)

閉経すると卵巣でエストロゲンが作られなくなりますが、副腎皮質で作られるアンドロゲン(男性ホルモン)を材料にしてアロマターゼという酵素によりエストロゲンが作り出されます。このアロマターゼの働きを邪魔して、エストロゲンを作れなくするのがアロマターゼ阻害剤です。



■ インスリン(いんすりん)

胃の後ろ側にある膵臓で作られるホルモンで、体の中で唯一血糖値を下げる働きがあります。また、血液中のブドウ糖を細胞に取り込み、エネルギーを生み出す働きを促進します。

血糖値を低下させるので、糖尿病の治療にも注射剤として用いられています。

■ インスリン抗体(IgE)(いんすりんこうたい(あい・じー・いー))

体内のインスリン(血糖を下げるために必要なホルモン)を異物として排除しようとする抗体。

■陰性(いんせい)

検診の結果が「陰性」とは、今回の検診では病気や異常がみられなかったことを意味しています。ただし、病気や異常が全くないという意味ではありません。必ず定期的に検診を受診するようにしましょう。

■陰性尤度比(いんせいゆうどひ)

「尤度(ゆうど)」とは「起こりやすさ」のことです。がん検診における「陰性尤度比」とは、本当にがんがない人が検査を受けたとき、本当はがんがある人に比べてどのくらい陰性の結果が出やすいかということを示す数値です。実際には、「特異度÷(1-感度)」で計算されます。陰性尤度比が高いほど検査の精度が良いと言えます。

■ウイルス(ういるす)

病原体の一種で、細菌よりずっと小さく、電子顕微鏡でやっとみえる大きさです。細菌は自分で増えることができますが、ウイルスはほかの生物にとりついて増え、病気を引き起こします。細菌には抗生剤が効きますが、ウイルスには効果がありません。ウイルスを退治するには、体の免疫を高めることが基本になります。HIV やB 型肝炎ウイルス(HBV)、C 型肝炎ウイルス(HCV) などには抗ウイルス剤が開発されています。

■腋窩リンパ節(えきかりんぱせつ)

脇の下にあるリンパ節を腋窩(えきか)リンパ節と呼びます。



■エストロゲン(卵胞ホルモン) (えすとろげん(らんぼうホルモン))

卵胞ホルモンとも呼ばれる、全身と子宮内膜を標的とするホルモンです。排卵の制御やコレステロールの制御、血液凝固作用など、さまざまな作用を持つ物質です。

乳がんの治療に用いられるエストロゲンを標的としたホルモン剤は主に3種類です。

・抗エストロゲン剤

エストロゲンに似た形の薬を用いてエストロゲン受容体を先にブロックし、エストロゲンの作用を妨害します。

・LH-RHアゴニスト製剤

エストロゲンを作るための指令(性腺刺激ホルモン)を出さないように働きかけ、結果としてエストロゲンの分泌が低下します。

・アロマターゼ阻害剤

閉経後には、男性ホルモン(アンドロゲン)からアロマターゼという酵素によりエストロゲンが作られます。アロマターゼの働きを妨害することでエストロゲンが作られないように働くのがアロマターゼ阻害剤です。

■炎症(えんしょう)

体が何らかの有害な刺激を受けたときに、これを取り除こうとして防御する反応が起こります。普通その反応が起きている場所は、熱を持ち、晴れ上がり、赤みがさし、痛みを感じます。これを「炎症」と言います。

「肺炎」「肝炎」「皮膚炎」などの「〇〇炎」という病名がたくさんありますが、これらはその部分が炎症を起こしている病気です。

例えば、肺炎は肺に入ってきた細菌やウイルスに抵抗するために炎症を起こす病気です。アレルギーの場合も、外から入ってくる物質に反応して炎症を起こします。

■炎症性乳がん(えんしょうせいにゅうがん)

炎症性乳がんはしこりを作るのではなく、がん細胞により乳房全体が炎症を起こしたようになります。

しこりを作る乳がんと比べて予後が悪いとされていますが、化学療法等の医療技術の進歩によって長期生存が可能になってきています。

■オッズ(おっず)

オッズとは、競馬などの賭けごとで古くから使われてきた概念で、成功a回・失敗b回の場合に $a \div b$ で表されません。

がん検診の場合、陽性である確率をp%とした場合、陽性でない(陰性である)確率は $(100-p)\%$ と表せるので、 $p \div (100-p)$ がオッズになります。

■オッズ比(おっずひ)

オッズ比は、あるできごとの起こりやすさを2つの群で比較して示す数値です。

例えば、ある病気にたばこが関係するかどうかを考えるとします。

右の表で、たばこを吸わない人が病気になるかどうかのオッズは① \div ②で表せます。

同じように、たばこを吸う人の病気オッズは③ \div ④です。

このとき、たばこによってどのくらい病気が増えたか(または減ったか)を示すのがオッズ比で、

$$\text{オッズ比} = \text{たばこを吸う人の病気オッズ} \div \text{たばこを吸わない人の病気オッズ}$$

と表せます。

このとき、たばこを吸うことによって、吸わない場合よりも病気になる確率が何倍に増える(減る)かをオッズ比が示しています。

■潰瘍(かいよう)

「潰」は崩れること、「瘍」は体の傷やできものことで、「潰瘍」は「体の一部が崩れてできた傷」という意味です。同じようにしてできた傷でも浅い場合は「びらん」と言います。

■化学療法(かがくりょうほう)

薬剤を使ってがんを治療することを「化学療法」と言います。

がん細胞が増えるのを抑えたり、がん細胞を破壊したりします。

手術でがんを切り取る前後に行ったり、放射線を当ててがん細胞の分裂を防ぐ治療(放射線治療)などと組み合わせ合わせて用いたりすることがあります。

化学療法は、注射や内服によって薬が血液中に入り、全身の隅々まで運ばれて体内に潜むがん細胞を攻撃し、破壊します。全身のどこにもがん細胞があってもそれを破壊する力を持っています。がんの初期にはがん細胞が体の一部分にとどまっていますが、次第に全身に広がっていくため、全身の病気としてのがんを治すということから考えると化学療法は効果的な治療法です。

■合併症(がっぺいしょう)

手術や検査などが元になって起こることがある病気を合併症と言います。

例えば、消化器の手術をすると腸の働きが鈍って腸がスムーズに動かなくなる場合があります。腸が動かないと、腸の中の食べ物が流れていくことができなくなり、詰まってしまうことがあります(腸閉塞)。

合併症は必ず起こるわけではありませんが、どんな手術・検査でもなんらかの合併症が起こる可能性があります。

■硝子体手術(がらすたいしゅじゅつ)

硝子体出血や網膜剥離が起これば行う手術です。顕微鏡を覗きながら、出血を吸引します。

■肝炎(かんえん)

肝臓に炎症が起こる病気です。ウイルスによるものと、アルコールによるものがあります。

ウイルスによるものは、A型・B型・C型などの種類があり、感染の仕方や治療法に違いがあります。

アルコールによるものはお酒の飲み過ぎで、肝臓に負担をかけすぎたことが原因です。

■肝がん(かんがん)と肝細胞がん(かんさいぼうがん)

肝臓にはさまざまな種類のがんが発生します。大きく分けて原発性肝がん(肝臓で発生したがん)と転移性肝がん(他の臓器で発生して肝臓へ転移したがん)があります。

原発性肝がんのうち、9割以上を肝細胞がんが占めています。このPDFでは、肝細胞がんを簡単に表すため「肝がん」と表記します。

■肝硬変(かんこうへん)

肝硬変の「肝」は肝臓、「硬変」は硬く変わることを意味します。「肝硬変」は「肝臓が硬くなる病気」です。

肝臓の細胞が壊れることで、肝臓が硬くなり、縮んでゴツゴツとしたこぶだらけになります。ウイルスやアルコールなどが原因で、肝臓の中の血液循環がうまくいかなくなります。

自覚症状がないまま、ゆっくりと進行する病気です。食欲不振・下痢などで始まり、腹水・黄疸・むくみ・出血・意識障害などの症状が現れることがあります。

■感度(かんど)

ある検査について、陽性(がんがある)と判定されるべきものを正しく陽性と判定する確率を言います。

がん検診では、本当にがんがある人を100人集めて検査を実施したとき、何人が「陽性」と判定されるかを示す数値です。

感度が高いほど、がんの見落としは少なくなります。感度が上がると特異度が下がるため擬陽性(がんではないのに陽性になる)の確率が上がります。がん検診では感度だけでなく特異度とのバランスが重要です。



■気管支漏(きかんしろう)

気管支漏(きかんしろう)とは、ブロンコレアとも言われ、卵の白身のような痰が1日に100mL以上出る症状のことを言います。

気管支炎やがんなどの病気が原因となります。治療薬を投与することで痰を減少させることができます。

■気胸(ききょう)

肺を包んでいる胸膜に穴が開いて、胸腔内の気体が肺を圧迫し、肺がしぼんで外気を取り込めなくなった状態を「気胸」と言います。

■ 気胸(ききょう)

肺を包んでいる胸膜に穴が開いて、胸腔内の気体が肺を圧迫し、肺がしぼんで外気を取り込めなくなった状態を「気胸」と言います。

■ 逆流性食道炎(ぎゃくりゅうせいしょくどうえん)

噴門(胃の入り口)の機能が低下したため、胃液が食道に逆流して炎症を引き起こした状態を言います。胃全体を切除した場合、胃液は作られませんが、胆汁や膵液が逆流して炎症を起こすことがあります。

■ 胸水(きょうすい)

肺や心臓が入っている胸の空洞に水がたまった状態を「胸水」と言います。正常な人でも5mL程度の液体が存在しますが、それ以上に液体が増えた状態が胸水です。胸水の症状としては胸の痛みがあり、水の量が多くなると呼吸困難となります。治療のためには原因となった病気を治療することが必要です。

■ グルカゴン注射(ぐるかごんちゅうしゃ)

血糖値を上げる作用を持つ注射です。

使用には事前に主治医からの許可が必要で、使用方法、使用量などの指導を受けなければいけません。糖尿病や他の病気、体の状態、アレルギー、他の薬との併用、その他の理由でグルカゴン注射の使用ができないことがあります。



■ 血糖値(けつとうち)

血液に含まれるブドウ糖の量を血糖値と言います。血液検査で測定した血糖値が高い(高血糖)場合、糖尿病と診断されます。

■ 原発巣(げんぱつそう)

そもそもがんが発生した器官や臓器のことを指します。がんが転移した場所(転移巣)と対比して用いられます。

■抗がん剤(こうがんざい)

抗がん剤とは、がん(悪性腫瘍)を治療するために用いられる点滴や注射、飲み薬などのことです。

抗がん剤は、細胞の増殖を止める作用を持つので、正常細胞よりも増殖が速いがん細胞に優先的に作用し、がん細胞を死滅させます。

ただし、正常細胞であっても増殖が比較的活発な細胞(髪の毛や粘膜など)は抗がん剤によりダメージを受けやすく、脱毛や口の渇き、吐き気などの副作用として現れます。

抗がん剤にはさまざまな作用を持つものがあり、組み合わせて使用することで治療効果を高める試みがなされています。

■高血圧(こうけつあつ)

血液が血管を通るとき、血管にかかる圧力を血圧と言います。

ホースに水を流すとき、水の量を多くするとホースがピンと張りつめた状態になります。これが高い水圧のかかっている状態です。また、ホースの一部分を押さえつけて通りにくくすれば、水の量が少なくても、抑えた部分よりも後ろはホースが張りつめた状態になります。

同じように、血圧も以下の2つの要因で決まります。

- ・心臓から送り出される血液の量(心拍出量)
- ・血液を流す血管の通りにくさ(末梢血管の抵抗)

これらの原因で血圧が高くなっている状態が、「高血圧」です。

ほとんどの場合に自覚症状はありませんが、知らないうちに動脈硬化から脳卒中、心臓病へと進展していくため、早期発見・早期治療が重要です。

■抗生物質・抗生剤(こうせいぶっしつ・こうせいざい)



細菌を退治する化学物質(抗生物質)から作られた薬です。「抗菌薬」とも言います。細菌による感染症の治療に用いられます。

抗生剤は細菌には効きますが、ウイルスには効きません。したがって、風邪などウイルスが原因となっている病気には、抗生剤を使うことはありません。

■抗生物質・抗生剤(こうせいぶっしつ・こうせいざい)

細菌を退治する化学物質(抗生物質)から作られた薬です。「抗菌薬」とも言います。細菌による感染症の治療に用いられます。

抗生剤は細菌には効きますが、ウイルスには効きません。したがって、風邪などウイルスが原因となっている病気には、抗生剤を使うことはありません。

■誤嚥性肺炎(ごえんせいはいえん)

細菌が唾液や胃液と一緒に肺に流れ込むことで起こる肺炎です。

ご高齢の方や麻痺などが生じる病気の時には、飲み込む機能や咳をする力が弱くなり、口の中の細菌や逆流した胃液が間違っ​​て気管に入りやすくなり、誤嚥性肺炎が発症することがあります。

寝ている間に発症することも多く、高齢者では命に関わるケースも少なくない病気です。

抗生物質やステロイドを使って治療しますが、再発を繰り返すと治療が難しくなります。

■細胞(さいぼう)

生き物の体を作っている最も小さい単位です。

膜で包まれた小さな部屋のようなもので、どんな生き物も1つ以上の細胞からできています。人間の体は、200種類以上の機能を持った細胞が60兆個集まってできていると言われています。

■シックデイ(しっくでい)

風邪や嘔吐、下痢などの消化器疾患、食欲不振などで食事がとれないなどの体調の悪い状態のことです。

■腫瘍(しゅよう)

「細胞が異常に増えて“かたまり”になったもの」を腫瘍と言います。

良性のものはその場にとどまっているだけなので、放っておいても大丈夫です。

悪性のものは、周囲を壊しながら広がったり(浸潤)、離れたところに飛び移ったり(転移)します。悪性の場合には治療が必要なので、まずは詳しく検査しましょう。

■腫瘍マーカー(しゅようまーかー)



がん細胞の表面には、正常な細胞では見当たらない物質があり、はがれて血液の中に流れ込みます。血液を調べてこのような物質がみつければ、がんにかかっていることがわかります。

がんの種類によってその物質は異なっており、それぞれの目安となる値が決められています。このような、がんであるかどうかをみる目印となる物質やその値のことを「腫瘍マーカー」と言います。

しかし、値は個人の状態にも左右されますので、高い・低いだけでははっきりとしたことは言えません。したがって、数値の解釈は患者さんが自分だけで行うのではなく、医師の説明を受けて判断することが大事です。

■小細胞肺がん(しょうさいぼうはいがん)

肺がんのうち2割程度を占める悪性度の高いがんです。

急速にがんが進展し、早期から脳など他の臓器へ転移しやすい傾向があります。

喫煙との関係が大きいとされています。

■浸潤(しんじゅん)

がんが周りに広がっていくことです。

「浸」はしみること、「潤」はうるおって水気を帯びることを意味しています。「浸潤」は、水が少しずつしみ込んでいくように、次第にがん細胞が周囲の組織を壊しながら入り込み、拡大していくことです。

がんが離れた部分に飛び火する「転移」とは異なります。

■深達度(しんたつど)【大腸がん・胃がん】

がんが胃や腸の壁のどの程度の深さにまで達しているかを示すのが「深達度」です。

通常、がんが壁に深く潜り込んでいるほど転移する可能性が高くなるので、それに応じた治療を行います。

■膵液漏(すいえきろう)

胃の切除後2週間程度が経つと、膵臓から出ている膵液という消化液が漏れ出してくることがあります。

膵臓は胃の近くにあり、目に見える傷がなくても膵液漏が起こることがあります。1～2週間の入院により治療が可能です。

■スクリーニング検査(すくりーにんぐけんさ)

まだ症状が現れていない段階で、がんがあるかどうかの可能性を調べる検査をスクリーニング検査と言います。

スクリーニング検査の結果は決定的なものではなく、がんであるかどうかはその後の診察や精密検査によって診断します。

■ステロイド(すてろいど)

炎症を鎮めたり、免疫の働きを弱めたりする薬です。

腎臓の上の方にある副腎皮質というところで作られたホルモンのうち、糖質コルチコイドという成分を合成した薬のことを指します。よく効く薬ですが、適切に使わないと体に影響が出ますので、必ず指示どおりに使ってください。

ステロイドには、飲み薬・注射・塗り薬・吸入剤などがあります。飲み薬や注射は、専門の医師の処方によって使います。塗り薬は、塗りすぎると良くないので医師の指導に必ず従ってください。吸入剤は、副作用が極めて少ないので安心です。

■生検(せいけん)

患部の組織の一部をメスや針などで切り取って、顕微鏡で調べる検査です。
通常、麻酔を使うので痛みはありません。この検査によって病気を正確に診断することができます。

がんの場合、まず、画像検査や内視鏡検査で病気がどこにあるかを確認し、がんの疑いが強ければ患部の一部を切り取って状態を観察します。この検査によって診断を確定し、治療に進みます。

■石灰化(せっかい)

乳管(乳汁が通る管)の内側にがん細胞が密集すると、乳管の先にある細胞に栄養が届けられなくなって壊死します。この壊死した細胞にカルシウムが沈着している状態が「石灰化」です。

ただし、乳管から分泌されたものが固まったところにカルシウムが沈着して石灰化することもありますので、必ずしも「石灰化」＝「がん」とは限りません。

マンモグラフィやマンモトーム生検によって、石灰化が悪性なのか良性なのかを判断します。

■セルフチェック(せるふちえっく)

乳がんの早期発見のために、自分で行う乳がんチェックのことです。
毎月、月経終了から1週間前後に行い、しこりやひきつれがないかを確認します。



■穿孔(せんこう)

「穿」は穴を開けること、「孔」は穴のことです。医療の分野では、何らかの原因で臓器に穴が開くことを「穿孔(せんこう)」と言います。

■センチネルリンパ節(せんちねるりんぱせつ)

センチネルリンパ節とは、リンパ管に入ったがん細胞が最初にたどり着く腋窩リンパ節のことで、がんのリンパ節への転移を見張っているという意味で“見張りリンパ節”とも呼ばれます。

手術の前に、がん目印を付ける物質(ラジオアイソトープまたは色素)を乳がんの近くへ局所注射し、手術中にセンチネルリンパ節を探し出して摘出することで、このリンパ節にがんが転移していないかどうかを調べることができます(術中迅速診断)。

センチネルリンパ節に転移が見つかった場合、腋窩リンパ節郭清を行います。

■造影剤(ぞうえいざい)

画像診断(X線、CT、MRIなど)の際に画像にコントラストをつけたり、特定の組織を強調して撮影するために使用する薬です。

例えばX線を用いる検査では、病気の部分の写り方がよりはっきりするようにX線をさえぎる物質が使われます。

■奏効率(そうこうりつ)

がんの治療において「効き目がある(奏効)」とは、がんの大きさが半分になり、その状態が1カ月以上維持されている状態のことです。

ただし、がんの大きさが縮小することと生存期間とはあまり関係がありません。

■組織(そしき)

同じ形や働きを持つ細胞が集まってひとまとまりになっている部分を「組織」と言います。

脂肪組織や神経組織などがあります。

■ダンピング症候群(だんぴんぐしょうこうぐん)

胃がんの手術後には、食物が胃を経過せず急速に小腸に送り込まれるため、通常よりも濃い食物が小腸に流れ込みます。

初期のダンピング症候群では、腸の中の濃度を下げようとして体の水分が腸の中に集まり、一時的に血液が減少したのと同じ状態になります。症状は、動悸や立ちくらみ、めまい、吐き気などです。

後期ダンピング症候群では、インスリンがたくさん作られすぎることによって血糖が異常に下がり、発汗や疲労感、立ちくらみ、めまいなどの症状が現れます。

症状の改善のためには、ゆっくりと(1時間半以上かけて)食事をしたり、1回の食事量を減らして回数を増やす(1日5回程度)などの工夫が必要です。血糖値が下がった場合には、チョコレートや飴を食べると症状が改善するため、常に持ち歩くと安心です。



■腸閉塞(イレウス)(ちょうへいそく(いれうす))

腸の中に入っている食べかすを肛門の方へ移動する力が障害されている状態を腸閉塞と言います。

お腹の張り、悪心・嘔吐、排便・排ガスができないなどの症状がみられます。腸閉塞の原因により治療法は異なり、絶食や鼻から管を通すことで軽快する場合から手術を必要とする場合まであります。

■鎮静剤(ちんせいざい)

心と体の緊張を和らげる薬です。脳の中で言語・運動・情動などを司る神経細胞が集まる大脳皮質に働き、不安・不眠・痛みなどを鎮めます。

■転移(てんい)

がんが体の離れた部分に飛び火して広がることを「転移」と言います。

■転移巣(てんいそう)

体の離れた部分にがんが転移した場合、その部分をもともとがんが発生した「原発巣」と対比して「転移巣」と呼びます。

■糖代謝異常(とうたいしゃいじょう)

血液中の糖分が多い状態。



■糖尿病(とうにょうびょう)

血液は体に必要なブドウ糖を運んでいますが、ブドウ糖の濃さが必要以上に高くなる病気が糖尿病です。膵臓が出すインスリンというホルモンが作られなかったり、量や働きが不十分だったりするために起こります。自覚症状はありませんが、そのままにしておくと血管が弱って詰まって破れたり、目が見えなくなったり、腎臓も弱ったりとさまざまな病気の元になります。

よく誤解がありますが、甘いものの取りすぎとは関係ありません。

また、「糖尿病」という漢字から尿に糖が出る病気だと考えられがちですが、尿に糖が出なくても血糖値が高くなっていれば糖尿病と診断されます。

■糖尿病昏睡(とうにょうびょうこんすい)

激しい高血糖が原因で意識がなくなる意識障害(昏睡)になることです。

■特異度(とくいど)

ある検査について、陰性(がんがない)と判定されるべきものを正しく陰性と判定する確率をいいます。がん検診では、本当にがんではない人を100人集めて検査を実施したとき、何人が「陰性」と判定されるかを示す数値です。特異度が高いほど、間違えてがんと判断することが少なくなります。特異度が上がると感度が下がるため擬陰性(本当はがんなのに陰性になる)の確率が上がります。がん検診では感度と特異度のバランスが重要です。

■尿糖(にょうとう)

尿の中に含まれているブドウ糖のことです。

健康な人は普通尿にブドウ糖は含まれませんが、血糖値が高い状態の人は血液中のブドウ糖が尿の中に出てきます。血糖値が高いかどうかを簡便に知るため、この尿糖の検査をします。

まれに、血糖値が高なくても腎臓の不具合で尿にブドウ糖が出る場合があります。これは腎性糖尿といって、本当の糖尿病とは異なります。

■膿胸(のうきょう)

胸膜が炎症を起こして、うみがたまった状態を「膿胸(のうきょう)」と言います。

■肺炎(はいえん)

さまざまな細菌・ウイルスの感染や喫煙・薬剤使用などによって、肺に炎症が起こった状態を「肺炎」と言います。主な症状は、発熱・せき・たん・胸の痛み・呼吸困難などで風邪と似ていますが、のどの痛みはあまりありません。適切な治療薬を用いれば1～2週間で症状が改善します。



■肺塞栓(はいそくせん)

肺塞栓とは、肺に酸素を送る肺動脈が何らかの原因で詰まり、肺の血液の流れが滞ることを言います。

■白斑(はくはん)

眼に起こる白斑は「硬性白斑」と「軟性白斑」が存在します。

・硬性白斑

糖尿病網膜症の初期段階から出現することがあります。血液成分の脂肪とたんぱく質が毛細血管から漏れ出て、網膜にシミを作った状態です。

・軟性白斑

糖尿病網膜症の少し進行した状態で出現することがあります。毛細血管になる前の細い血管が詰まり、網膜にシミを作った状態です。

■ 播種(はしゅ)

「播種(はしゅ)」とは、本来は「種をまく」ことを意味しています。そこから、種をまいたようにがん細胞が散らばることを「播種」と言います。

■ 光凝固術(ひかりぎょうこじゅつ)

細い血管の壁が盛り上がることでできたコブ(毛細血管瘤)や出血部分の悪化を予防するために、レーザー光を照射して網膜を凝固させる手術です。

出血の広がりや浮腫の改善、新生血管の発生予防などの効果が期待できます。
その他にも糖尿病網膜症の症状の1つである白斑の治療に使用されることもあります。

■ 非小細胞肺癌(ひしょうさいぼうはいがん)

肺癌のうち、扁平上皮がん・腺がん・大細胞がんをまとめて非小細胞肺癌と呼びます。

■ 非浸潤がん(ひしんじゅんがん)

がんができた場所から広がらず、その場にとどまっている場合に「非浸潤がん」と呼ばれます。
広がりが小さいので、大きな切除など患者さんにとって負担が大きい治療をせずにすむ場合がほとんどです。

■ 肥満(ひまん)

医学的に言う「肥満」とは、脂肪が一定以上に多くなった状態のことです。

肥満の判定は、BMI (Body Mass Index : 肥満指数) で行います。

BMI は次の計算式で計算されます。

$$\text{BMI} = \text{体重(kg)} \div (\text{身長(m)} \times \text{身長(m)})$$

これまでの研究では、BMI が22 の場合に最も病気にかかりにくいとされています。日本では、BMI が25以上の場合に「肥満」と判定されます。

■副作用(ふくさよう)

薬による、病気の治療に役立たない働きや有害な反応のことを広く「副作用」と呼んでいます。

副作用は、薬がもたらす光に対する影の部分と言えます。

副作用には害のあるものもあれば、害のないものもあります。害のあるもの場合は、医師や薬剤師が特に丁寧に説明しますので、よく聞いてください。体に害を与えるものを『有害事象』と言うことがあります。

どんな薬にも副作用があります。薬の効果が強い抗がん剤やステロイドなどは、副作用にも害のあるものが多いですが、副作用をむやみに怖がる必要はありません。効果と副作用のバランスを見ながら薬を使用し、副作用が発生した場合には症状に応じた治療をします。逆に副作用がないと思われがちな漢方薬にも副作用はありますので、注意が必要です。

■腹水(ふくすい)

お腹の内臓と内臓の隙間にある液体のことで、その液体が増えてたまる症状のことも「腹水」と言います。

この液体は本来、内臓の動きをなめらかにする働きをしているのですが、内臓の病気によってこの液体が増えすぎると、ぽっこりとお腹が膨らみます。

例えば、肝硬変によって血液中に水分を保つ働きが弱くなることで、血管から水分が染み出し、腹水が増加します。

■プロゲステロン(黄体ホルモン)(ぷろげすてろん(おうたいほるもん))

プロゲステロンは黄体ホルモンとも呼ばれ、子宮内膜を標的とするホルモンです。

月経周期や妊娠の維持、体脂肪・血糖値の調節などの役割を果たします。



■分子標的薬(ぶんしひょうてきやく)

がん細胞だけが持っている分子やがん細胞が特に多く作り出している分子を標的にして、がん細胞を攻撃する新しいタイプの薬です。

従来の抗がん剤と比べてがん細胞に選択的に効果が現れ、脱毛などの副作用が出にくいとされています。

■分子標的薬(ぶんしひょうてきやく)

がん細胞だけが持っている分子やがん細胞が特に多く作り出している分子を標的にして、がん細胞を攻撃する新しいタイプの薬です。

従来の抗がん剤と比べてがん細胞に選択的に効果が現れ、脱毛などの副作用が出にくいとされています。

■ヘモグロビンA1c（へもぐろびんえーわんしー）

ヘモグロビンA1c（HbA1c）とは、過去1～2カ月の血糖値の状態がわかる値です。

ヘモグロビンA1cを測定することで、糖尿病を診断したり、最近の糖尿病の治療状況を知ることができます。

糖尿病は血糖・尿糖・自覚症状などでも診断できますが、これらは体調による変化が大きく、ヘモグロビンA1cの方が安定した値が得られることが知られています。

ヘモグロビンA1cとは、別名糖化ヘモグロビンとも言い、ヘモグロビンにブドウ糖がくっついたものです。

ヘモグロビンとは、血液中で酸素を運ぶ働きをする赤血球に含まれる色素です。このヘモグロビンは血液中のブドウ糖とくっつきやすく、しかも一度くっつくと離れません。

血糖値が高い、つまり血液中のブドウ糖が多くなると、それだけ多くのブドウ糖がヘモグロビンにくっつくこととなります。ヘモグロビン全体の中で、糖がくっついたヘモグロビンA1cの占める割合（%）を調べることで最近の血糖のコントロール状況がわかるのです。

■扁平上皮がん（へんぺいじょうひがん）

扁平上皮細胞にできたがん（悪性腫瘍）のことです。

口の中・舌・のど・食道・気管・気管支・肛門・女性の外陰部・膣・子宮などの扁平上皮細胞でおおわれた粘膜や皮膚などが、ただれたようになります（潰瘍）。

■扁平上皮細胞（へんぺいじょうひさいぼう）

体の表面や、内側が空洞になっている臓器の粘膜、分泌・吸収などの機能をもった臓器の表面の細胞を「上皮細胞」と言います。上皮細胞の中で、つぶれたような平たい形をしているものを「扁平上皮細胞」と呼びます。



■縫合不全（ほうごうふぜん）

手術の時に縫い合わせた臓器が、正しくつかずに一部または全部がはがれてしまうことを縫合不全と言います。手術を担当した医師の技術不足だと思われがちですが、栄養不足や血行不良など、医師の技術とは無関係なさまざまな要因によって縫合不全が起こり得ます。

■ポリープ(ぼりーぷ)

胃や腸の内側にできる、いぼやきのこのような形のできもののことです。

良性のものと悪性のものがあります。悪性のものに変化する恐れがあると診断された場合は、手術や薬で取り除きます。ポリープができた場所や大きさ、形状などによって、がんになる危険性は異なります。最近では、小さなポリープのうちに、内視鏡で簡単に取り去る方法もあります。

ポリープは内臓にできることが多いですが、声帯や鼻の奥の粘膜や皮膚にできる場合もあります。

■ホルモン受容体(ほるもんじゅようたい)

ホルモンとは、体の中で作られ、血管を通して移動し、標的となる組織や臓器の働きを調節する指令を届ける物質です。

非常に微量で作用するため、多すぎても少なすぎても異常が起こります。

ホルモンの標的となる組織・臓器には、特定のホルモンを受け取る「受容体」と呼ばれる分子があります。

あるホルモンと、それに対応するホルモン受容体は「鍵」と「鍵穴」の関係になっているので、ホルモン受容体を持つ組織・臓器のみでホルモンの作用が現れます。

■ホルモン療法(ほるもんりょうほう)

乳がんには、ホルモン受容体を持っているタイプと持っていないタイプがあり、ホルモン受容体を持っているタイプの乳がんは全体の7割程度とされています。このタイプでは、ホルモンが乳がん細胞の持つホルモン受容体に結合すると増殖が活発になります。そこで、受容体にホルモンが結合するのを阻止したり、ホルモン分泌そのものを低下させるような薬(ホルモン剤)を用いて乳がんの治療を行います。これをホルモン療法と呼びます。

■無気肺(むきはい)

肺が膨らまない、肺に空気が入っていない状態を「無気肺」と言います。

気管支に何らかの原因でたん・異物・血液・腫瘍などがあって詰まってしまい、その先の肺に空気が入らない状態です。



■毛細血管瘤(もうさいけっかんりゅう)

糖尿病網膜症では初期に起こる症状の1つです。細い血管の壁が盛り上がることでできます。

■陽性(ようせい)

検診の結果が「陽性」とは、病気や異常が疑われる状態です。

再検査や精密検査によって、本当に病気や異常があるかを確認する必要があります。

■陽性尤度比(ようせいゆうどひ)

「尤度(ゆうど)」とは「起こりやすさ」のことです。がん検診における「陽性尤度比」とは、本当にかんがある人が検査を受けたとき、がんがない人に比べてどれくらい陽性になりやすいか、ということを示す数値です。実際には感度÷(1-特異度)で計算されます。

陽性尤度比が高いほど検査の精度が良いと言えます。

■予後(よご)

今後の病状についての医学的な見通しのことです。

治療を行った後に、病状がどのような経過をたどるのかを予測し、見通しを立てます。判断材料には数々のものがありますので、必ずこうなるというものではなく、ある確かさを数値として表すことしかできません。

「予後が悪い」とは「これから病気が悪くなる可能性が高い」、「予後が良い」とは「これから病気が良くなる可能性が高い」ことを意味しています。

■罹患率(りかんりつ)

一定の期間を決めて調査を行い、期間中に新たに発生した患者が人口当たり何人に当たるかを示す数値です。通常、人口10万人当たりの患者発生数から計算されます。

罹患率=患者発生数÷10万人

1人の人が期間内に病気にかかる危険の大きさ(リスク)を示す指標とされています。

■良性疾患(りょうせいしっかん)

がんではない、命に関わるのが少ない病気を良性疾患と呼びます。

病気によっては「良性」だからといって放っておいて良いとは限りません。そのため、個別の判断が必要です。



■リンパ系(りんぱけい)

全身の組織と組織の間を流れる体液はほとんどが血管に戻りますが、約1割は毛細リンパ管を通して静脈へ流れ込みます。これをリンパ系と言い、毛細リンパ管が合流して太くなったものをリンパ管、ところどころソラマメ状に太くなっている部分をリンパ節と言います。

■HER2 タンパク質(はーつーたんぱくしつ)

HER2 (ハーツー) タンパク質は、細胞の表面に存在しており、増殖因子からの指令を受け取って細胞を増殖させる働きがあります。

正常な細胞もHER2 を持っていますが、何らかの理由でHER2 が異常にたくさん作られるようになった細胞は、増殖の制御が効かなくなりがん化します。

乳がんでHER2 タンパク質がたくさん作られている場合、予後が悪いと考えられていましたが、トラスツズマブなど分子標的薬の登場により効果的な治療が可能になりました。

■LH-RHアゴニスト(えるえいちあーるえいちあごにすと)

LH とは黄体ホルモン(エストロゲン) の略、RH とは黄体ホルモンを作らせるホルモンの略称で、アゴニストとは、本物そっくりの「そっくりさん」のことを言います。したがって、LH-RHアゴニストとは、黄体ホルモンを作らせるホルモンのそっくりさんです。体にこのそっくりさんがたくさん入ると、本物のLH-RHが働かず、エストロゲンが作られなくなります。

■QOL (Quality of life) (きゅーおーえる(クオリティー・おぶ・らいふ))

病気や加齢によって、生活に制約ができたり、苦痛を伴ったり、その人らしく生活することができなくなってしまうことがあります。また、手術や抗がん剤などの治療が原因となって、それまでどおりの生活ができなくなる場合もあります。患者さんの人生観や価値観を尊重し、その人がこれで良いと思えるような生活をできるだけ維持することに配慮した医療が求められています。

QOL を決めるのは患者さん本人で、それを助けるのが医療者です。QOL の元になった言葉は、クオリティー・オブ・ライフ(Quality of life) で、直訳すれば「生活の質」です。自分でこれで良いと納得できる生活の質ということです。

